

農業農村工学会サマーセミナー2016 参加報告

Report of JSIDRE Summer Seminar 2016

○前田 顕¹・辰野 宇大²・今出 和成³・小杉 重順⁴・
田中 宣多⁵・樋口 慶亮⁶・宮井 克弥⁷・崎川 和起⁸

○MAEDA Akira, TATSUNO Takahiro, IMAIDE Kazunari, KOSUGI Shigeyori,
TANAKA Yoshikazu, HIGUCHI Keisuke, MIYAI Katsuya and SAKIKAWA Kazuki

1. はじめに

サマーセミナーは、年に一度、農業農村工学会本大会が開催される際に、複数の大学から学生が集まり、農業農村工学に関わるいくつかのテーマに関する様々な議論や、お互いの研究活動について情報交換を行う学生主体の企画である。

本企画は、1996年以降ほぼ毎年、継続的に実施されてきた。基本的な運営はすべて本学会の学生会員を中心とし自主的に行われる。17回目の開催となったサマーセミナー2016では、「農業、農業工学の現状・課題・将来についての意識の共有」をメインテーマとして議論した。本稿ではサマーセミナー2016の活動報告および参加者の感想を報告する。

2. 2016年の活動報告

農業や農業工学の全体像や課題について共通認識を持つことを目的としてメインテーマが設定した。サマーセミナー2016では、メインテーマを考えるうえで、3つのサブテーマを設定し、テーマごとに分かれてグループワークを行った。サブテーマは、「農業農村工学」、「復興農学」、「大学生や大学院生の役割」の3つが設定された (Fig. 1)。

2. 1. 農業農村工学

農業農村工学の研究分野では、農地を意識した研究が多く、現場と研究者が連携して、課題解決に取り組む場合がよくある。今回は、人とのつながりが重要である本分野において、学生に農業農村工学を知ってもらう機会であるサマーセミナーに若手学会員をどのように集めるかに焦点をあて、グループ内で議論が進められた。結論として、サマーセミナーの質を向上させることや認知度を上げること、活動内容を広く認知してもらえるように、アウトプットの機会をつくることが重要であることが示され、具体的な方法についてもいくつかの提案がなされた。

2. 2. 復興農学

復興農学は農業分野における復興に関する学問である。東日本大震災から6年が経過した現在、被災地の復興に関わる多くの研究や復興活動が行われている。グループ内では、本当の意味での復興とは何かを議論した。復興の有効性評価には住民、農業従事者、研究

¹ 宮崎大学農学部森林緑地環境科学科 Faculty of Agriculture, University of Miyazaki

² 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agriculture and Life Science, The University of Tokyo.

³ 岡山大学大学院環境生命科学研究科 Graduate School of Environmental and Life Science, Okayama University.

⁴ 北海道大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Hokkaido University.

⁵ 京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University.

⁶ 東京農工大学大学院連合農学研究科 United Graduate School of Agricultural Science, TUAT.

⁷ 内外エンジニアリング株式会社 Naigai Engineering Co.,Ltd.

⁸ (株) 三祐コンサルタンツ Sanyu Consultants Inc.

キーワード：農業農村工学，広報，若手交流，サマーセミナー

者、行政など多方面からの評価が必要であるため、一般論に留まらないように注意しながら、議論を進めた。今回は、現地研修会において宮城県石巻の被災後の整備を受けた水田（以下、復興水田）を目にし、農地を震災前の状態に戻すのではなく、改良を加え震災前よりも向上させる必要があると考えた。グループ内では、議論の対象を宮城県石巻の復興水田とし、復興の機能評価について話し合われた。結論として、農業農村工学を学ぶ学生として、全ての機能が震災前と比べて向上することを「理想の復興」とした。しかし、予算期限によるスピード性と水田の「食糧生産」機能の復旧が重要視され、水田の多面的機能すべてを向上されることは、非常に難しい状況にある。我々がこうした問題に向き合うために、勉強会の開催等で学ぶ機会を継続して設ける必要がある。



Fig. 1 サマーセミナー2016 参加者と

2. 3. 大学生や大学院生の役割

まず、大学生や大学院生の役割とは何なのかを議論し、大学生には教育と学生生活の二つの役割があると考えた。教育としてはカリキュラムや研究室による強制力のある義務的な活動を通して本分野を知り、学ぶという役割がある。一方、学生生活には自由な興味に従って各々が視野を広げるといった役割があると考えられた。そして、大学生は教育・学生生活の摺合せを経て、社会に出ていくという構図が現状であると考えた。さらに、農業農村工学分野に関わる人材の他分野への流出を防ぐ方法についても、それぞれの経験や考えていること、自分たちに何ができるかを話し合った。結論として、先輩が後輩に対して本分野を知る機会や意義を積極的にアピールすることが人材の確保につながるのではと考えた。ただし、他分野への流出は必ずしも本分野にとってマイナスではなく、繋がりを活かして活発な情報交換ができればプラスの面も大きいのではないかという意見もあった。

3. 参加者としての感想

私は参加者としてテーマ3に取り組んだ。学部生にも取り組みやすい内容の反面、テーマの範囲が広く結論を出すまでとても大変だった。最終的には、互いが知識を持ち寄り助け合うことで納得のいく結論を導けた。この時に感じた達成感は、私の自信につながったと思う。普段、院生と交流する機会が少ない私にとって、刺激を受けることが多かった。意見を出し合っていく中で院生の次々とする多様な発想はどれも興味深く、スキルアップにつながったと思う。また、学部生の意見も院生にはない意見として尊重していただき、話しやすい環境を作っていただいたことはとてもうれしかった。この他にも、泊まり込みで意見交流を行い、院に行くことについての相談や研究に対する考えなどを聞くことができ、とても貴重な経験になった。サマーセミナーに参加することに対するデメリットがなく私の視野を広げる素晴らしい機会であったと感じている。今年もサマーセミナーがあることを本当にうれしく思う。今後も学生から社会人、研究者などの若手の交流の場となるよう、本企画を継続して開催していきたい。

謝辞 農業農村工学会事務局の方々、大阪府大中桐先生、宮城大学千葉先生、参加者の皆様には、サマーセミナー開催にあたりご協力いただいた。ここに深く感謝申し上げます。